

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520341

研究課題名(和文)「顔」の問題化によるロシア文化史の再検討(ドストエフスキーからマレーヴィチへ)

研究課題名(英文) Towards the History of Faciality in Russian Culture from Dostoevsky to Malevich

研究代表者

番場 俊 (BAMBA, Satoshi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：90303099

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では19世紀後半から20世紀前半のロシアにおける人間の顔という主題に注目し、文化史におけるその意義を明らかにすることを試みた。この主題は、ドストエフスキーの『白痴』や『悪霊』をはじめとする具体的な作品分析と、理論研究(キリスト教神学における神の表象不可能性、外傷的な眼差しという精神分析の観念など)の両面から検討された。ドストエフスキーの小説やマレーヴィチ、エイゼンシュテインの理論的著作の分析によって、この時期の顔の表象が、写真の誕生と発展のインパクトによる観相学的想像力の歴史的変容を反映していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study I have tried to draw attention to the theme of the human face in the late nineteenth- and early twentieth-century Russia and define its significance in cultural history. This theme was explored both in relation to the specific novels (including Dostoevsky's *The Idiot* and *The Demons*) and from some theoretical perspectives (for example, the unrepresentability of God in Christian theology and psychoanalytic notion of traumatic vision). By analyzing Dostoevsky's novels and theoretical writings of Malevich and Eisenstein, I have arrived at a clear picture of how the representations of the face in this periods reflect the historical shift in the physiognomic imagination under the impact of the birth and development of photography.

研究分野：人文学

キーワード：顔 表象 ドストエフスキー マレーヴィチ エイゼンシュテイン ロシア

## 1. 研究開始当初の背景

ドストエフスキーをはじめとする 19 世紀小説(とりわけ『白痴』1868 年)において、人間の顔が特権的な主題としてあらわれていることは疑いようもない。プリミティヴィズムから無対象へ、そして顔のない人物像へと様式を変化させていった画家マレーヴィチや、ティパージュとモンタージュによって演劇では不可能であった集団の顔のギャラリーを作り出そうとした映画監督エイゼンシュテインらの 20 世紀芸術においても同様である。だが、これまでは、文学における「顔」と絵画や映画における「顔」、あるいは哲学的主題としての「顔」は、それぞれの領域においてばらばらに論じられており、小説論/絵画論/芸術理論の垣根をこえた広い視点から「顔」の問題を統一的に扱う研究はほとんどなかった。

本研究代表者は、平成 20-23 年度基盤研究(C)「19 世紀から 20 世紀初めのロシアにおける身体と表象の関係の構造転換」において、ドストエフスキーの創作活動と、同時代のメディア・テクノロジーや社会制度の変化(ジャーナリズムの発達、速記術、裁判制度改革等)の関係を考察した。そこで得られた成果を活かし、問題を人間の「顔」にしばりこむことによって、身体に対する社会のまなざしと芸術表象の関係をより精緻に歴史化し、ドストエフスキーをはじめとする 19 世紀小説と、マレーヴィチの絵画やエイゼンシュテインの映画をはじめとする 20 世紀ロシア・アヴァンギャルド芸術といった、従来、並べて論じられることがほとんどなかった諸問題を統一的な視点から考察することが可能になるのではないかと期待された。

## 2. 研究の目的

本研究は、文学(ドストエフスキーをはじめとする小説)、芸術(マレーヴィチをはじめとする絵画、エイゼンシュテインの映画ほか)、思想(バフチンの記号論、セルゲイ・ブルガーコフやフロレンスキーのイコン論ほか)の三領域を横断する「顔」の主題に注目する。それを通じて、(1)ロシアの事例を中心に、19 世紀後半から 20 世紀前半における「顔」の表象の変容を、ジャンルの違いを越えて明らかにするとともに、(2)文学/芸術/思想/メディア史の諸問題を巻き込む「顔貌性 faciality」の問題化を通して、「表象 representation, Vorstellung」概念の批判的再検討を試みることを目的としている。

具体的な課題は以下の通りである。

(1) 小説論: ドストエフスキーの小説(『白痴』、『悪霊』1871-72 年ほか)における顔の主題について、作品中におけるその機能(顔の写真や肖像画といった主題を分析し、バフチン

がいう小説の「多声的」構造との関係)を明らかにする。

(2) 絵画論: マレーヴィチの無対象絵画論やエイゼンシュテインのモンタージュ理論が、中世のイコン論や、19-20 世紀の生理学、心理学とのあいだにもっていた両義的な関係を検討するとともに、18 世紀末のラファター以来、「顔」に関する西欧の想像力を深く規定していた観相学(physiognomy)的想像力が 19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて変容していくさまを明らかにする

(3) 理論研究: 「顔」に関する作品研究の具体的成果をもとに、ロシアにおけるバフチンやフロレンスキーのみならず、ハイデガーやドゥルーズとった哲学者たちや、ソクタグやセクーラといった写真論者たちによるイメージ論を検討することによって、「顔」と「表象」の関係を理論的に考察する。

## 3. 研究の方法

(1) 小説論においては、まずはドストエフスキーの作品の検討(『白痴』、『悪霊』)を中心にすすめた。主人公たちの顔の描写や、作品中で言及されている絵画作品をとりあげ、「写真」をはじめとするメディアの問題に十分な注意を払いつつ、「顔」の主題がテキストの構造に及ぼす作用を検討した。さらに、「小説」というジャンルと「顔」の主題の結びつきをより広い視野からとらえるために、明治期の日本近代小説まで検討の対象を拡げ、比較文学的な検討をおこなった。

(2) 絵画論については、「芸術における新しいシステムについて」(1919 年)、「神は捨て去られていない」(1922 年)、『無対象の世界』(1927 年)といったマレーヴィチの理論的テキストをとりあげるとともに、20 世紀初めのロシア芸術における「顔」の表象について検討するために、カンディンスキー、エイゼンシュテインといった画家、映画作家や、フロレンスキーといった宗教哲学者の著作を検討した。

(3) 「顔」の主題に係る理論研究としては、バフチン、フロレンスキーといったロシアの理論家たちのテキストに加えて、ドゥルーズによる画家フランシス・ベイコン論、ソクタグやセクーラの写真論などをとりあげ、検討した。

以上(1)~(2)の全体にわたって、北海道大学附属図書館および同スラブ研究センターで文献調査をおこなうとともに、国内では入手困難な資料については、ペテルブルクのロシア・ナショナル・ライブラリー(PHB)で調査をおこなった。絵画作品については、バーゼル美術館、ペテルブルクのロシア美術館、アムステルダム市立美術館にも赴き、調査をおこなった。

#### 4. 研究成果

(1) 小説論で最初に取り組んだのは、ドストエフスキー『白痴』に登場するハンス・ホルバイン(子)の《墓の中の死せるキリスト》(1521/22年)の考察である。その際に導きとなったのが、他者の苦痛の表象の歴史という観点から、ゴヤの《戦争の惨禍》(1810-20年)と並んでドストエフスキーの名を挙げるソクタグの著作『他者の苦痛へのまなざし』(2003年)であった。ソクタグは、他者の苦痛の表象そのものよりは、むしろ、他者の苦痛の表象に向き合う私たちの態度という倫理的問題に注意を向ける。そこで彼女が念頭に置いていたのは、磔にされた子どもを前に砂糖煮を食べる空想を涙ながらに語る『カラマーゾフの兄弟』のリーザではないかと推測されるが、『白痴』では、他者の苦痛を見るという問題が、ヒロインのナスターシャ・フィリップヴナの苦悩の顔を見る経験と、拷問の末に無惨な死をとげたキリストを描いたホルバインの絵を見る経験を重ね合わせることによって探究されている。ホルバインの《墓の中の死せるキリスト》について考えるためには、極端な横長というこの絵の特異なフォーマットと、その展示方法(絵と観者の身体的関係)に関する考察が必要になるが、この点、本科研費によってスイスのパーゼル美術館に赴き、この作品の実物に触れる機会を持つことができたのは幸運であった。ホルバインの作品とそれをめぐる『白痴』の登場人物たちの振舞いは、「見るべきもの」として差し出されたものではないものを覗き見してしまった人間の倫理的困難を指し示している。この点でそれは、ソクタグが論じる写真ジャーナリズムの問題を予見している。

つづけて、小説というジャンルと人間の顔の表象の関係をより広いパースペクティブから検討するために、ドストエフスキーともロシア文学史ともいったん離れ、明治日本文学史における小説の形成の問題を考察した。人間の顔が克明な描写の対象となるのは近代リアリズム文学においてであり、たとえば伝統的な昔話においては主人公の顔の具体的な描写がみられないことはすでにプロップが指摘しているが(『口承文芸と現実』1963年)、日本文学史においても、亀井秀雄が、坪内逍遙『当世書生気質』(1885-86年)や二葉亭四迷『浮雲』(1887-89年)における小説的テーマとしての顔の誕生について論じている(『身体・この不思議なるものの文学』1984年)。しかしながら、『当世書生気質』で人物同定の鍵となるのはその顔ではなく「守袋」と「短刀」という象徴的所有物であり、亀井の示唆の通り、小説が真の「顔」を獲得し、登場人物と読者の欲望の対象となるのは、逍

遙が三年後の1889年に発表した短編『細君』あるいは同年に発表された二葉亭『浮雲』の第三篇である。そこで明らかになるのは、小説において主人公の「顔」を問題として現出させるのは語りの構造であり、三人称で語る「作者」の出現(野口武彦)であるということである。

さらに、ドストエフスキーの『白痴』と『悪霊』(その刊行されなかった章「チホンのもとで」)における「外傷的な視覚」について検討した。その理論的な支えとなったのは「対象a」としての眼差しに関する精神分析のラカンの考察である(『精神分析の四基本概念』1973年)、『白痴』と『悪霊』ではいずれも主人公による顔の写真の経験が問題になっていたことが確認できる(『白痴』のナスターシャ・フィリップヴナの顔の写真、『悪霊』のスタヴローギンがフランクフルトの文房具屋で偶然に見つけた、マトリョーナによく似た少女の名刺判写真)。こうした外傷的な顔の視覚という問題は、写真というメディアに関するドストエフスキーの数少ない言及(オリガ・コズロワの写真アルバムへの書き込み(1873年)に見られる「苦しみにも等しい回想」という言葉から理解することができる。19世紀後半の想像力において、人間の顔の問題は、写真というメディアによって困難になってしまった回想という問題に結びつけられているのである。

『悪霊』の「外傷的な視覚」に関する検討結果は、「チホンのもとで」の新訳に反映されることになった。集英社文庫「ポケットマスターピース」シリーズから近刊の『ドストエフスキー』に収録される予定である。

(2) 絵画論については、当初はマレーヴィチの芸術論が中心となる予定であったが、検討を進めていくうちに、20世紀ロシア・アヴァンギャルド芸術の運動のなかではマレーヴィチに対立する位置を占めるともいえるエイゼンシュテインの映画理論の重要性が明らかになってきたことから、とりわけ研究期間の最後では、後者に関してもかなりの時間を割くことになった。

マレーヴィチの画家・理論家としての営為における「顔」の問題について、西欧モダニズムおよびロシア・イコンの伝統との対比において検討した。マレーヴィチにおける「顔」の主題は、いわば「顔の拒否」とつねに縊りあわされている。1916年のマニフェスト「キュビズム、未来主義からシュプレマティズムへ」で「絵に描かれた顔は生の憐れむべきパロディーにすぎない」(Собр. соч., т. 1, с. 53)と断言した彼は、1920年の私信では、《黒い正方形》をはじめとする無対象絵画について、「私はそこに、かつて人々が神の顔のうちに見ていたものを見ているのです」(Малевич

о себе, т. 1, с. 125)と告白している。人間の顔に対するマレーヴィチの態度の揺れは、2013年10月から2014年2月にかけてアムステルダム市立美術館で開催されたマレーヴィチの大規模な回顧展 Kazimir Malevich and the Russian Avant-Garde で数多くの作品に触れることで実感することができた。理論的著作に関しては、本研究代表者は、マレーヴィチが明示的に「顔」の主題について論じた1927年のパウハウス講義『無対象の世界』の第二部をすでに考察しているが(番場俊「絵画の始まりと終わり、そして顔の出現と消滅について イコンからマレーヴィチへ」、栗原隆編『形と空間のなかの私』東北大学出版会、2008年、305-323頁)、今回の研究でも、第一部「絵画における付加的要素の理論序説」とあわせて、この講義の重要性が改めて確認された。概してマレーヴィチの理論的著作は、理論的にも言語的にもかなり混乱しており、そこから一貫した主張を論理的に整理するのは困難であったが、1920年の論考『神は捨て去られてはいない』の6における「人間は《すべて》を理解し、識別しようとする。だが、一体この《すべて》が彼の前にあるだろうか。この《すべて》を目の前の机の上に置いて、それを研究[することが可能であろうか]」(宇佐美多佳子訳)という言葉は注目に値する。これをハイデガーの1938年の論考「世界像の時代」と比較検討することで理解されるように、マレーヴィチにおいて問われていたのは、「表象=直前に立てること(представление/Vorstellung)」の原理そのものであり、「表象されること=眼の前に確保されること」に対する抵抗としての他者の顔という問題であった。シュプレマティズムにおける顔の顕現と顔の表象の拒絶という問題は、神の顔の顕現とその表象不可能性というイコン論の問題と深く関わっている。しかし同時にマレーヴィチは、『無対象の世界』の第一部において、タブローの内部に侵入して従来の表象システムを破壊する「付加的要素」(セザンヌの曲線、キュビズムの鎌形、シュプレマティズムの直線)を、体内に入り込んで生体に変化をもたらす細菌のアナロジーで捉えてもいる。マレーヴィチにおける顔の主題は、美術史と神学と生理学の接点において捉えなければならない。

そのマレーヴィチを、ジガ・ヴェルトフとともに「形式的な遊び」として糾弾したエイゼンシュテインは、20世紀前半の顔に関する想像力がこうむったいまひとつの変容の証左となっている。「映画形式」(1935年)のエイゼンシュテインは、ラファターにはじまる観相学の伝統を映画制作に資するものとして評価しつつ、人間の顔における外見と内面の

一致という観相学の理念を拒否し、映画における「顔」を、現実世界による裏付けを必ずしも必要としない記号とその組み合わせ(モンタージュ)の問題として処理してしまう。この点については学内の研究会で一度発表をおこなったが(「観相学、エイゼンシュテイン、そして私たち」、間主観的感性論研究推進センター研究会、2016年1月18日、新潟大学)、マレーヴィチとエイゼンシュテインの対立は、20世紀における顔をめぐる想像力の分岐点として、さらに検討を進める必要がある。

(3) 理論研究では、パフチン(「美的活動における作者と主人公」(1920年代前半)、『ドストエフスキーの詩学の諸問題』(1963年)、1943年の二つの草稿「修辞学は、その虚偽の度合いに応じて……」、「鏡の前人間」ほか)、フロレンスキー「イコノスタシス」(1922年)といったロシアの理論家たちのテキストに加えて、ドゥルーズ(*Francis Bacon: The Logic of Sensation*, 1981)、ソクタグ(*On Photography*, 1977; *Regarding the Pain of Others*, 2003)、セクーラ(“The Body and the Archive” 1986; *Fish Story*, 2nd ed, 2002)、ポドロガ(*Феноменология тела*, 1995)といった現代の理論家たちによる著作を検討した。パフチンについては、愛媛大学法文学部と新潟大学人文学部との学術交流講演会(2013年12月21日)において「顔の表象文化史序説 パフチンとドストエフスキーから」と題する口頭発表をおこなっている。ソクタグについては前述の通りドストエフスキーの『白痴』をめぐる論考に、ポドロガについてはエイゼンシュテインをめぐる口頭発表に取り入れられている。セクーラの著作の検討は、本研究代表者が研究分担者として参加した別の科研費研究の成果となった(挑戦的萌芽研究「デジタル時代における声の形態と経験に関する領域横断的研究」、代表・高木裕)。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

Satoshi BAMBA, “Crisis of Seeing in Bakhtin and Dostoevsky”

国際中欧・東欧研究協議会 ICCEES 第9回世界大会(国際学会)

2015年08月05日

神田外語大学(千葉県千葉市)

[図書](計2件)

編者 栗原隆

著者 栗原隆、鈴木光太郎、福島治、白井述、  
番場俊ほか（計 14 名）  
『感性学 触れ合う心・感じる身体』東北  
大学出版会、2014 年 3 月、全 312 頁  
このうち、「小説と顔のコミュニケーション」  
（67-84 頁）を番場俊が単独で執筆

编者 栗原隆

著者 栗原隆、鈴木光太郎、福島治、白井述、  
番場俊ほか（計 13 名）  
『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ  
出版、2013 年 3 月、全 234 頁  
このうち、「他者の苦しむ顔を見る ドス  
トエフスキー、ホルバイン、写真」(178-193  
頁)を番場俊が単独で執筆

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

番場 俊 (BAMBA, Satoshi)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：9 0 3 0 3 0 9 9

### (2)研究分担者

なし